【65】

氏　名（本籍）	カルナナヤケ グルンナンセラーゲ ドン アヌラ カルナナヤケ（スリランカ）
学位の種類	博　　士（図書館情報学）
学位記番号	博　甲　第　5216　号
学位授与年月日	平成 22 年 1 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	図書館情報メディア研究科
学位論文題目	**Students' Patterns of Library Use Focusing on Information Search**

主　査	筑波大学教授	石　井　啓　豊
副　査	筑波大学教授	植　松　貞　夫
副　査	筑波大学教授	溝　上　智恵子
副　査	筑波大学准教授	歳　森　　敦
副　査	筑波大学名誉教授	永　田　治　樹
副　査	千葉大学教授	竹　内　比呂也

論文の内容の要旨

図書館利用の様態を把握することによって、そのサービス対応を決定することはもっとも基本的な経営行動である。本研究は、このような行動を支援するための基礎的な研究で、学生の図書館利用に対する認知的な能力や利用様態・属性に関する質問紙調査を実施し、その結果を分析、学生の図書館利用パターンなどの特性をとりまとめたものである。

本研究はまず、先行研究（情報探索行動分析並びに図書館利用者の行動パターン研究）のレビューを行い、利用者の情報探索行動には知識やスキル、すなわち認知的な能力が深く関わるという知見に基づき研究の枠組みを設定した。これを踏まえて、コロンボ大学（スリランカ）の医学及び社会科学を専攻する学生を対象にした質問紙調査（第 1 次調査）を行い、学生の図書館利用パターンに関する知見を取りまとめた。また筑波大学の医学専門学群及び社会・国際学群の学生を対象にした第 2 次調査によってそれを補完した。

第 1 章は、本研究の背景と目的、研究の課題、研究の意義、研究の限界、用語定義を示した。挙げられた研究課題は、①図書館利用に関する学生の認知的なコンテキスト（図書館利用の知識やスキル）はどのようなものとして把握できるか、②学生の属性と図書館利用の態様はこの認知的コンテキストとどのように関連しているか、③学生間に異なった図書館利用のパターン（認知的コンテキストと利用態様のパターン）が存在するか、④文化的に相違する利用者コミュニティ間には異なる図書館利用のパターンが見出されるかを、把握するという 4 点であった。

第 2 章は、先行研究に関する文献レビューを次の 2 つの観点から行い、本研究の方法的な基盤を叙述した。一つは人々の情報探索プロセスの議論に関するもので、人々はどのように探索行動をとっているかについての議論のレビューである。知識のギャップ（Allen）、不確定性（Kuhlthau）、意味付与過程（Dervin）、変則状況（Belkin）など、知識やスキルそしてその他心理的な要因の点から人々の探索行動を議論したものを取り上げた。二つ目は、学生の図書館利用パターンの把握についての先行研究である。学生の専攻分野、学年などの属性や、利用目的などの利用様態面からのパターン研究を吟味した。

第3章は、第1次調査の方法に関するもので、対象としたコロンボ大学（スリランカ）の教育システム、質問紙の設計、標本抽出などについて述べた。必要な情報を探す学生の行動を把握するために、情報探索に関する5つの段階（探索の開始、資源・道具の選択、情報と資源の発見、図書館のサービスやシステムの利用、自己評価）に12のインシデントを想定し、それに対応する知識・スキルに関する質問を構成した。さらに、学生の図書館利用の特徴を把握するために、学生の属性（専攻分野、学年）と図書館利用様態（来館頻度、来館目的、他の図書館の利用の有無、情報探索の効力感、選好する資源、図書館コレクションへの対応、情報ニーズに対する満足度、探索の代替戦略や図書館員への依存、探索プロセスにおける期待など）に関する質問を設定した。

第4章は、2007年1月に実施した第1次調査結果とその分析である。12の情報探索インシデントに関わる質問の因子分析によって認知的コンテキストのフレームを示す4つの因子（①発見・探索の方法、②資源やサービスの利用、③探索ニーズ、④自分の能力）が抽出された。また、その因子スコアによってクラスター分析を行い、4グループ（1）技術的な関心のある利用者、2）肯定的・積極的な利用者、3）使い始めて間もない利用者、4）結果を求める利用者）を特定した。さらに、学生の属性・利用様態に関する回答結果集計を示している。クラスター分析で把握したグループによる属性・利用態様の相違について、カイ二乗検定とANOVAによるグループ間比較の結果を示した。学年、専攻分野、来館頻度、来館目的、情報探索の効力感に関して、グループ間に有意な差が見られた。

第5章は、文化的環境が異なる状況における図書館利用の認知的コンテキストの検出を試みるために、2009年10月に筑波大学で実施した第2次調査の設計である。方法はおおむね同じである。ただし、認知的なコンテキストをみる質問では、日本の状況などを考慮して質問数を20に拡大した。

第6章は、第2次調査の結果の分析である。認知的な能力に関する回答結果の因子分析では、認知的コンテキストのフレームを示す6つの因子（①熟達した探索能力、②図書館サービスへの信頼、③ディジタル資源の認知、④利用者支援の活用、⑤資料探索の手法、⑥事前の知識）が抽出され、また因子スコアによるクラスター分析の結果では、1）不安な利用者、2）肯定的・積極的利用者、3）仲介を求める利用者、4）自己依存の利用者という4種のグループが見出された。さらに第1次調査と同じく、学生の利用様態や属性とのクロス集計及びその検定結果を示した。スリランカと日本の調査で、「肯定的・積極的利用者」という共通グループがみられたものの、それらはスリランカと日本の利用者の全体のうち、それぞれ4分の1か5分の1しか占めておらず、むしろそれぞれに特徴的なグループがそれぞれの利用パターンを持つことが示された。たとえば日本におけるディジタル情報への強い指向性を持つグループのような文化的環境の違いを反映するものがあった。

第7章は、以上の調査結果を踏まえた、考察と結論である。上記の分析により、本研究では図書館利用に関する学生の認知的なコンテキストのあり方を示す4つの因子が示されたこと、および学生の4因子に対する反応の類似性によって、学生は複数のグループに区分されたこと、さらにグループによって図書館利用の態様に相違があることを確認している。以上によって学生の図書館利用には、図書館利用の認知的コンテキストとそれに関連した利用態様のあり方による利用パターンを認めることができると結論している。また、調査状況の異なる第1次調査と第2次調査を重ねてみると、抽出された因子やグループについて異なった面と類似の面が出てきたことについての考察を取りまとめた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、学術図書館経営において不可欠な学生利用者についての利用研究である。経営学でいえばマーケティング・リサーチ領域の研究であり、顧客様態の把握を目的とする。従来マーケティング・リサーチで

は、デモグラフィックな属性等により顧客をセグメント化し、それぞれどのような消費をする顧客かをさぐるというものであった。しかし、近年顧客行動が多様化する中で、人々のより内的な消費動機や生活スタイルなどに着目した研究調査がおこなわれるようになっている。本研究の取り組み方もこのような推移に呼応している。これまで図書館の利用研究といえば、図書館が提供するサービス設定に対する意向調査といった、いわば外的な条件への反応を把握することが主眼であったが、しかし、ここでは、利用者をとりまく側ではなく利用者自身に着目し、その利用のあり方を解明しようとする。そのためにこの利用研究は、図書館情報学の新しい研究潮流である利用行動研究の領域の成果を踏まえて研究設計を行ったものとなっている。

本研究の方法上の特徴は次の点にある。

1）本研究における方法は、質問紙による調査でありその結果の統計分析である。調査質問の構成に関しては、上述のように利用者行動に焦点を当てた設定となっている。すなわち、一般に情報探索行動は個人的な知識やスキルなど認知的な能力が深く関わっているという知見を基盤にして、図書館利用の５段階においてどのような能力が発揮されているかを問うものとなっている。これはこれまでの図書館の利用パターン研究ではなかった視点であり、本研究の独創的な点である。

2）利用行動に影響を及ぼすと思われるのはもちろん認知的能力だけではない。利用者の情緒的な要素、あるいは利用者が身に付けた社会的・文化的な要素もある。これらについても、本研究では、利用者の利用様態や属性などとして、別途質問項目を設定した。その意味で利用者の利用行動に影響を及ぼす主体側の要素に関しては、本研究ではほぼ不足なく全体を取り上げ検討したといってよい。

また、本研究の意義については、次の点があげられる。

1）学生は認知的なコンテキスト（知識やスキル）に関して４つのグループに区分でき、利用様態・属性においてグループ間の相違が見られた。すなわち、認知的コンテキストと利用態様に関して異なる利用パターンが存在することが示された。これらは、研究課題①～③に応えるものであり、本研究が見出した知見である。

2）第２次調査においても第１次調査と同様に、学生が異なる認知的なコンテキストと利用態様を持つグループに区分された。この結果によって、研究課題①～③に対する知見は補強されたといえる。また、二つの調査によって文化的相違のある利用者コミュニティ間で図書館の利用パターンが異なる実例が得られたことは、研究課題④に対する一定の回答を示しているといえる。上記 1）とあわせて当初設定された研究課題に対応する回答を与えるものである。

3）学生利用者の図書館利用状況を左右する要因を新しい視点から把握しようとするこの種の研究では、事前にはどのような要因が出現するかを予測するのは必ずしも容易ではない。文化的・社会的環境の相違を超えた普遍性の検討も必要である。そこで本研究では文化的環境を異にする第１次調査と第２次調査を行った。しかし、それだけでは必ずしも十分ではなく、このようなそれぞれの状況を踏まえた探索的な調査を継続的に重ねていくことが不可欠であると考えられる。逆に、本研究のこれらの努力が今後の他の研究調査の枠組みとなるものと評価したい。

4）本研究では、認知的コンテキストにおいて異なる学生のグループを発見し、それが利用態様においても異なることを示し、それによって利用パターンの相違があることを示している。しかし、グループ間の利用態様の相違の分析において、特に専攻分野による利用態様への影響を考慮する必要が残されているなどの点で必ずしも徹底したものとはなっていない嫌いがある。上記 3）とあわせて今後の課題として残されているといえよう。

以上のように、本研究の探求の過程は論理的に構成されており、飛躍なく研究課題を追究しているといってよい。論文構成も論理的で説得性がある。大学図書館における学生の利用研究は、一方では理論的なもの、他方では実践的なものに分けられがちで、本研究のようにその両者をつなぐような研究は多くない。今後は、

本研究で得られた知見を活かして図書館経営を推進し、さらに研究を深めることによって、より高いレベルの図書館サービスの実現に結びつく研究の展開が期待される。

よって、著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。